

今、いかに咲くか？

当山住職に晋董してから、「住職は河井繼之助をどう思われますか？」と檀家様に尋ねられることがあります。ご存知の通り、長岡では河井に対する評価が分かれるところで、それは檀家の方々においても同じことです。へたに返答すると「はあ？」となります。「長岡を守ろうとしましたね」も「長岡を焦土にしましたね」も、静謐な客間が開戦の場になりかねません。檀信徒の中に東西両軍がおられるので、武装中立を維持することも榮涼寺住職のつとめなのです。

そこで仏教の人生観から返答することになっています。河井は仏教的に生きようとした人物であったということです。

繼之助の諱は秋義です。義は人として守るべき正しい道理です。日本語のことわざに「名は体を表す」とあります。名前・名称がその本質・

実態・姿を表しているという意味です。また英語の name の語源は、仏教経典に使われていた古代インドのサンスクリット語の *naman*、またはその俗語であるパーリ語の *nama* です。これらは「〇〇に向かっていく」「〇〇を依りどころにする」という意味を含んでいます。

つまり、人は生まれたときに付けられた名前に向かって歩きはじめ、名前を依りどころにして自分の生きる意味を見いだすということなのです。これに従えば河井は義に向かって歩み、義を依りどころとして生きることに人生の意味を認めたということになります。当時の住職が義を残した戒名「忠良院殿賢道義了居士」を授与したのも、その評価のあらわれだったのかもしれない。

さて、私は良寛の漢詩・歌・句を好みます。「散る桜 残る桜も 散る桜」という句があります。早い遅

いの違いはあっても、咲いた桜はいつか必ず散ってしまう（生まれた者は必ず命が尽きる）という仏教の無常観です。そして、鑑賞者は詠まれていない後の句を想像して楽しむのですから、私は「だからこそ、今を精一杯に咲くだけです」と受けとめています。

桜はなぜ咲いて散ってしまうのか？ 仏教では答えの出せない問いを考え続けるほど人生は長くないと説きます。それよりも「今、いかに咲くか？」が喫緊の問いなのです。自分にとって価値があると確信できたことに命の花を咲かせること、これこそ仏教的な生き方です。河井は義に向かい義を依りどころとして今を

精一杯生きること、人生の価値を見いだしたのではないのでしょうか。ただし、その生き方には条件が付きまします。それは桜がそうであるように、誰にも迷惑をかけないという一点です。

庭の桜を仰ぎ、良寛の句を反芻し、長岡と日本の行く末を案じつつ、ひとり「今、いかに咲くか？」を熟慮する姿に、孤高の尊さと寂寞たる哀しみが偲ばれてなりません。

齊藤隆信（さいとうりゅうしん）
昭和四一年長岡市生まれ
平成二八年七月より榮涼寺住職
佛教大学教授・博士（文学）

常 峠 我場

河井繼之助記念館
友の会会報

第37号

2025.3

〈編集・発行〉
河井繼之助記念館友の会
新潟県長岡市長町1丁目甲1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526

〈編集人〉
荒木法子 恩田富太
棚橋智仁 山田明
友の会事務局
〈構成・印刷〉
高遠印刷株式会社



荒木貞夫陸軍大臣（昭和9年頃）

新たに判明！ 只見で亡くなった長岡藩士の墓

●石垣龍三郎の墓

慶応四年（一八六八）戊辰戦争で、長岡藩士とその家族九名が、只見で亡くなっている。現在、名前がわかっているのは、河井継之助と石垣龍三郎である。石垣龍三郎は、大黒の戦いで負傷し、只見で亡くなった。享年十三歳。十三歳ということはおそらく元服前であり、満年齢では十二歳である。今なら小学校六年生、身体も未熟で戦場では足でまといになるため、兵士として戦っていたわけではなく、おそらく戦いに巻き込まれ、負傷したと考えるのが自然である。石垣龍三郎の墓は、只見新屋敷にある。墓は長岡方面を向いて建てられている。



石垣龍三郎の墓（只見公民館向かい）

●花輪秀八・ 名見耶林之丞の墓

河井継之助、石垣龍三郎の他に、只見で亡くなった三名の長岡藩士の名前が、高野貞吉が著した「戊辰戦争ノ記」に載っている。三人の長岡藩士とは、市野又十郎、花輪秀八、名見耶林之丞である。

長岡藩の戊辰戦争について書かれた最初の本は、明治五年（一八七三）の「戊辰戦記」である。旧藩士が、明治政府の要請で、まとめた報告書である。以後、旧藩士の間で、写し取られ、加筆されて、明治二十三年長岡藩士戦没者二十三回忌に「長岡藩戊辰戦争日記」として完成した。高野貞吉の「戊辰戦争ノ記」はこの「長岡藩戊辰戦争日記」を写したものであることは間違いない。ただ、高野貞吉の「戊辰戦争ノ記」は、誰が、どこで戦死したか、傷を負ったかを詳細に記録している点が特筆できる。これは「戊辰戦記」になかったことであり、高野貞吉が遺族や生き残った旧長岡藩士に聞き書きし、

まとめたものである。高野貞吉は、一時、柏崎県庁に勤めていたこともあり、まじめで、几帳面な性格の高野貞吉が、詳細に調べ、長岡藩士の戦史の修正をはかったものであり、「戊辰戦争ノ記」は信ぴょう性が高い史料である。なお、高野貞吉は後の連合艦隊司令長官山本五十六の実父であることを付け加えて置きたい。



赤塚家にある長岡藩士の墓（私有地のため無断見学不可）

市野又十郎が福井（長岡市福井町）の戦いで重傷を負い、只見で亡くなったのは間違いない。というのは、数年前に、市野又十郎の子孫の方が、只見町河井継之助記念館に来館され、市野又十郎が負傷し、只見で亡くなったが、明治になって、遺族が遺骨を持ち帰ったという話を伺ったことがあるからである。

昨年、旧只見村の氏神である瀧神社の話を聞くために、赤塚公生さんを訪ねたことがあった。赤塚家は只見の瀧神社の宮司を代々務めてきた家である。その時、公生さんから、赤塚家の墓所に長岡藩士の墓があるというのを聞き、非常に驚いた。まったくの初耳だった。赤塚家の墓所は共同墓地でなく、林の中に赤塚家代々の墓のみが建っているため、長岡

藩士の墓はこれまで人目に触れることはなかったのである。訪ねてみると、赤塚家の墓地の奥に、二基の苔むした墓があった。通常、墓は亡くなったから、数年経てから、建てるものである。そうだとすれば、市野又十郎の遺骨は、戦後、遺族が持ち帰ったということだったので、市野又十郎の墓は建てる必要はなかったはずである。そう考えると、赤塚家の墓地にある二基の墓は、花輪秀八、名児耶林之丞の墓である可能性が高い。

長岡藩士も戊辰戦争後、会津藩同様、想像を絶する過酷な生活を強いられた。明治になって、花輪秀八、名児耶林之丞の遺族もいつか遺骨を長岡に持ち帰りたいという願いをもっていたが、生活に窮して離散したか、代を重ねるうちに忘れ去られていったのかもしれない。市野又十郎、花輪秀八、名児耶林之丞は、北越の戦いで、負傷し、



花輪・名児耶・松原の墓（国土地理院地図をもとに作成）

只見にやってきて、失意のうちに亡くなったものと思われる。この調査で、只見で亡くなった長岡藩士で名前がわかったのが河井継之助、石垣龍三郎、市野又十郎、花輪秀八、名児耶林之丞の五名である。

長岡城落城後、多くの長岡藩士とその家族が、只見にやってきた。その数一万数千人、戸数三十戸の楢戸村に五百八人が泊まったという記録がある。楢戸村の名主の記録には、二名が亡くなったとある。また、只

見村のある家では将来を悲観した長岡の侍二人が自刃したと伝えられている。この四名の名前は未だ判明していない。彼らの氏名を調査し、解明することは今後の課題である。

戊辰戦争から一五六年、若くして散った長岡藩士の無念に思いをはせ、花輪秀八、名児耶林之丞だと思われる藩士の菩提を弔い、只見町戊辰戦争の史跡として、長岡藩士の墓を守り、今後とも永く伝えていきたいと思う。

● 松原金三郎の墓

只見保育園の裏の墓地に長岡藩士松原金三郎と刻まれた墓がある。小さな墓には長岡士族松原金三郎大正九年四月二十二日七十八歳と刻まれている。長岡中央図書館で調べたところ、松原曾部次という人物を見つけた。肩書きは従卒小隊司令官とあった。小隊司令官という肩書きから中級クラスの武士であったと思われる。松原金三郎と松原曾部次は同一人物である可能性が高い。その根拠は松原姓の長岡藩士が一名しかいないこと、もう一つは松原金三郎は曾部次が正式な名前であり、金三郎は松原家代々の通称であると考えら

れることである。

松原曾部次も普段は金三郎と称していた。只見で亡くなった時も墓に「松原金三郎」と通称名が刻まれた。松原金三郎は長岡城落城後、只見に逃れてきた。その後他の長岡藩士とその家族は会津若松に移った。理由は不明だが、松原金三郎は只見に残り、大正九年に七十八歳で亡くなっている。

松原金三郎がどんな人物であったか、古老に聞いても知る人がいないのが残念である。



松原金三郎の墓

目黒信（めぐろまこと）

プロフィール

一九四九年只見町生まれ、河井継之助記念館友の会員、只見町河井継之助記念館ボランティアガイド元東京都公立中学校教員

河井継之助が小山良運に宛てた書状

小山良運は、長岡藩医江戸小山家の小山良為（針医）の四男として、文政九年（一八二六）、長岡に生まれた。通称善之、字は良長、または小天とも号した。長じて後、禄一六〇石・一五人扶持の長岡藩医となった。初め江戸に学び、その後嘉永五年（一八五二）夏、緒方洪庵の適塾に入門した。（門人録二二六番）。当時適塾には、薩州の松木弘庵（後の寺島睦則）、長州の村田良安（後の大村益次郎）、肥後の佐野常民などが学んでいた。医学だけでなく当時の新知識に触れ得る場所であり、物理・兵学・法制や経済、西洋事情、諸藩の動向をも学んだ。後長崎に赴きオランダ人について知識を深め、九州・四国の各藩を遊歴して名士と交わり知見を広めた。彼が持ち帰った蘭書の数々は、河井継之助をはじめとする長岡藩士の動向に大きな影響を与えることになった。良運は病気がちであり表面にでることはなかったが、その学問や見識は時流を抜いており、負けず嫌いの継之助が自身は「継さ」と呼ばれながら、良

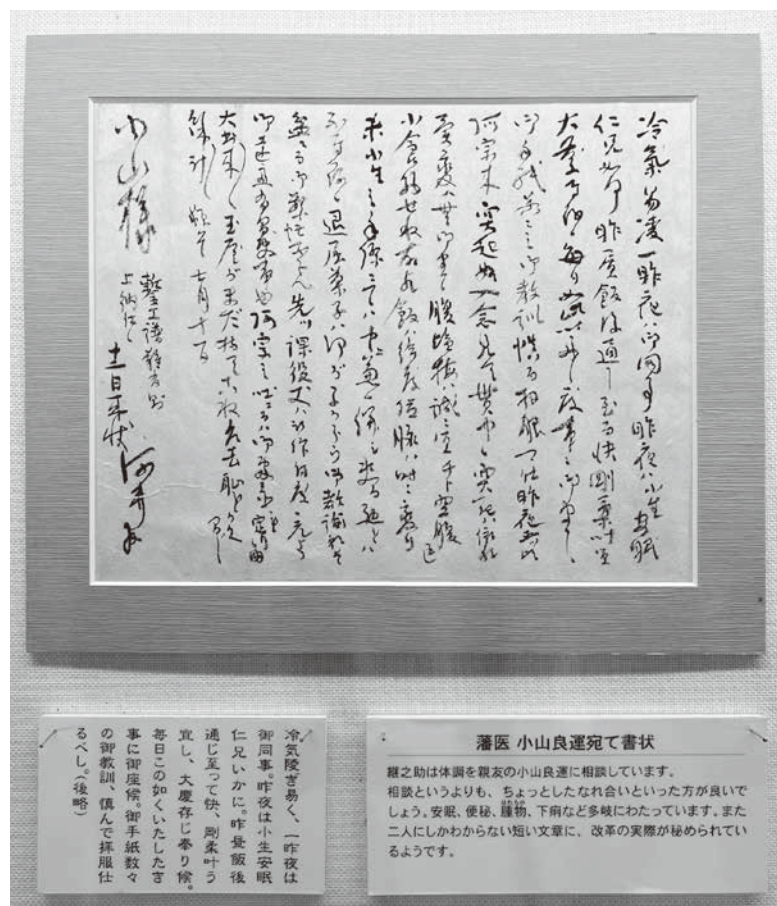
運に対して「良運さん」と兄事していたという。良運の長男で日本に近代洋画のあけぼのをもたらした小山正太郎の語るところによれば、良運は継之助と相通じるところが多く、藩政改革や刀剣や詩文などの趣味に至るまで同じであり、禄高改正などの藩政改革や徳川政権の消長についてしばしば論を交わした。二人の間柄は極めて親密であり、良運は継之助がしばらく姿を見せないと継之助さんはどうしておいでがないのかと不思議がついていたという。継之助は公私にわたって相談をもちかけていた。

今後予定されている特別展示では、継之助が小山良運に宛てた書状を展示する。当館が平成十八年（二〇〇六）十二月二十七日の開館に際して、地元北越銀行から継之助の書状三十八通の寄贈を受けたものである。現在そのうちの一通を展示中である。今回は令和八年（二〇二六）に迎える当館開館二十周年に向けて初公開するものである。内容は継之助の体調（安眠、便秘、

腫物、下痢等）を細々と報告したり、私生活上の悩みを打ち明けたりする等の姿や当時の長岡の暮らしの一端が見えてくる。幕末を駆け抜けた風雲児は、戊辰戦争がクローズアップされがちであるが、日常の人柄がわ

かる貴重な史料である。特別展示を機会に人間河井継之助の理解が深まることを願っている。

参考 『ふるさと長岡の人びと』（中田



当館展示中の書状

館長が行く

勝楽寺と少山

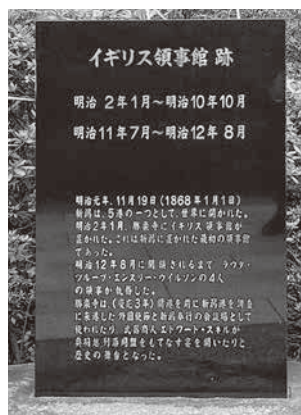
「余乃ち馳せて新潟に赴き、スネル氏館する所の寺院に至る。」これは、鬼頭平四郎（以下、「少山」）の『少山自叙伝』のくだりである。少山は長岡藩校崇徳館の教授で督学（教頭）を兼ねた。妻永井寿との間に六男一女あり。悌二郎は外交官、福島甲子三は宝田石油会社専務、玉淑は「青島新報」社長、増は女子師範学校を卒え、石川氏に嫁す、弟に八丁沖渡河作戦の先導を務めた熊次郎がいる。今回は、その寺院と少山がなぜ新潟に来たのか当時の状況を探ることが目的である。その寺院とは勝楽寺である。新潟駅から萬代橋を渡り、枉谷小路を進む。江戸時代NEX T21と旧三越デパートにかけて新潟奉行所があった。交差点を右折しイタリヤ軒の先に西堀通八番町勝楽寺前バス停がある。門から本堂まで五十メートル程である。エドワルド・スネルのことや明治二年から英国領事館だった解説がある。



新潟市西堀通八番町にある勝楽寺の参道

慶応四年（一八六八）五月十九日に長岡城が落城し、総督河井継之助が加茂に入り皆川方を本営にしたのが二十一日。少山がはじめ藩の重役から命じられたのは水原にある会津の陣屋に行き弾薬を調達することだった。この頃長岡藩一日の弾薬消費量は十万発。その補給は大変だった。早籠で頼みに行く途中に弟熊次郎に会っている。弾薬欠乏は会津藩も同様だった。会津藩士は「異人スネルの船が新潟に来ている。彼は貴藩の河井重役と親しき者の由、新潟に行つて彼に相談すれば入手できるかもしれない」といった。少山は独断で、すぐ新潟へ飛んだ。

スネルの商館は、横浜開港資料館



イギリス領事館跡やスネルの記述がある

に近い山下居留地四十四番地（現マンション）にあった。横浜で継之助と親交を結んでいたスネルは、五月六日に横浜を出港した。米沢藩のため、小銃を粟島に陸揚げした後、新潟に着いたのは十二日だ。十七日から勝楽寺を宿舎とし陸揚げした荷物は本堂に置いて、商売を始めている。勝楽寺には東北諸藩が武器を求めて殺到した。少山は「長岡藩河井継之助の使者である。」と叫ぶと、数十人が列を作り戸外で順番を待っていたが、スネルは扉を開けて中に呼び入れ直ちに面識もなく無一文の少山の申し出に応じた。大砲火薬三千斤、元込銃四十丁、それに相應する弾丸を手に入れた。少山はすぐ包装し船便で加茂に送った。加茂に戻ると、少山は、専断で事を処理したことを詫びた。継之助は非常時の対応を誉めた。明日代金を届けさらに注文をするように命じた。少山はスネルの器量の大きさに驚き評価した。継之助は、それが長所だが、狡猾でもあり過信してはならないとも

言っている。少山は後に官軍が新潟に入りスネルを捕え、彼が万国公法に違反して新潟で武器を売っている罪を問われたことは、継之助のことは証明してもいるととらえている。藩校崇徳館の蔵書印がある『万国公法』は長岡市立阪之上小学校に引き継がれている。継之助も少山も崇徳館で『万国公法』を読める環境にあった。少山は七月末までほとんど五十日間、加茂と新潟を往復してスネルと七千両の取引を続けたが、「一度も彼に売弄されたことはなかった」という。加茂で熊次郎と会った際少山は米粉の蒸しもちをもらっている。この時が永訣となった。（中田）



長岡市立阪之上小学校に所蔵される国際法解説書『万国公法』

開館十八周年記念講演会

令和六年十二月一日開催（於・長岡グランドホテル）

幕末四藩の苦悩、継之助の決断

講演会を聴いて

十二月一日、長岡グランドホテルに於いて、作家・歴史家の渡辺れい氏をお迎えし、開館十八周年記念講演会が開催されました。

演題は「幕末四藩の苦悩、継之助の決断」です。

二百五十余名の聴講者の皆さんは大変興味深く聴き入っていました。

（小林）

牧野家十七代目当主

牧野 忠昌

渡辺れい氏の小説『最後の決断（戊辰戦争越後四藩の苦悩）』は、出版された時に購入し拝読した。この度の著者直接の講演は柔らかな口調で大変興味深く拝聴できた。以前から疑問に思っていた著者の名前「れい」は母上の名前からとったと仰っていたことで、優しいお心をお持ちの方だと思った。京都で学生生活を過ごされたと同じ、私達夫婦が京都育ちであり大変親近感を覚えた。

河井継之助記念館友の会会長

星 貴

越後の他藩が幕末期に於いてどのように苦悩し決断を迫られていたのかを学ぶ良い機会を得た気がします。特にこれまで裏切り者扱いされてきた新発田藩については講演に合わせた様に公開された映画「十一人の賊軍」で描かれていた新発田藩の苦悩を頭に浮かべながら興味深く拝聴させて頂きました。もっと時間が欲しいと思わせてくれる講演会でした。

河井継之助記念館友の会会員

池田 鈴江

今回の講師、渡辺れい氏の著書『最後の決断』と『維新の墓標』を三年前に読了しぜひ話を聞きたいと思い参加しました。幕末から明治維新まで多くの作家が著書を出しているが小藩であるが故に大藩に有無を言えず従わざるを得なかったのか？長州の大村益次郎は越後・会津を断固殲滅と打ち立てたとの事、それが事実であるならば維新から約六十年を経ようとしている今、生粋の越後人として未だに溜飲が下がらないのです。

河井継之助記念館友の会会員

玄 昶日

新発田藩は同盟軍から離脱するが、その決断にあたっては複雑な事情と様々な背景が絡んでいたことを知り、講演は有意義であった。歴史から多くを学ぼうとすれば、長岡藩のみの視点に埋没してはならないだろう。一方、西軍についての諸藩の掲げた「勤王」は、実現すべき思想であったのか、あるいは生き残りのための手段であったのかも問われるポイントであろう。



上段左から：古屋ガイドボランティア・川上幹事・清水幹事

中段左から：本村幹事・山田幹事・小林ガイドボランティア・高橋会計監査・恩田副会長・中野ガイドボランティア・廣井幹事・永井ガイドボランティア・南波ガイドボランティア

下段左から：渡辺副会長・牧野美和子様・牧野忠昌顧問・渡辺薫様・渡辺れい様・高野観光交流部長・星会長・下田相談役・中田館長

蒼龍の遺徳を偲んで… 河井継之助没後百五十七年祭法要・八丁沖の戦いを偲ぶ会

河井継之助の百五十七年祭法要が、新暦の命日十月一日にあわせて、直近の令和六年十月六日に菩提寺の榮涼寺に於いて、友の会の主催で営まれました。

祭壇には寺院が所有する継之助の肖像画が掲げられ、牧野家十七代当主の牧野忠昌様ご夫妻、河井家八代当主の河井弘安様と先代の奥様の恵美様、只見町長、会津若松市副市長、長岡市副市長、長岡藩士殉節顕彰会ほか、県内外から約五十名が参列しました。

御住職の入場の後、友の会の星会長による祭文の奏上に始まり、読経と続くなか厳かに参列者の皆様が焼香をされました。その後、全員で墓前に移動し線香を手向け、手を合わせて継之助を偲びました。

法要後は、今まで行われてきた「八丁沖ウォーク」の代わりとして「八丁沖の戦いを偲ぶ会」と銘打ち、北越戊辰戦争伝承館の見学や史跡巡り、河井家を囲む会（直会として）を開催しました。

伝承館に到着すると、長岡四斤山砲研究会が複製した四斤山砲の実演

が行われ、点火された空包の大音響と砲口から吹き昇った白煙に驚きの声があがりました。

伝承館の見学は、北越戊辰戦争伝承館運営協議会の皆様のご協力により、館内の展示と屋外の史跡のガイドをしていただき、参加者は熱心に耳を傾けていました。また、伝承館の二階バルコニーから、眼下に広がる稲刈りの終わった広大な水田を見渡したり、周辺の史跡巡りをしながら、往時の八丁沖渡河作戦の決行、長岡城奪還戦に想いを馳せている様



河井継之助没後157年祭法要



四斤山砲の実演



北越戊辰戦争伝承館を見学



河井家を囲む会

子でした。伝承館の見学後、近くの会場に移動して河井家を囲む会を開催しました。参加者の皆様全員から、近況や継之助への想いなどを語っていただき、隣の方々と談笑しながら和やかな直会となりました。（酒井）

遠方からの客人

● インタビュー ③

稲垣直美さん（神奈川県川崎市）



令和6年11月27日

● 来館のきっかけは

亡き父が歴史小説を集めていて、その中に『峠』の初版本がありました。読んでみて幕末に興味が出たこと、夫の仕事の関係で魚沼に訪れることが多いこともあり、この度思い切って長岡まで来ました。

● 河井継之助記念館を見学して

コンパクトで無駄のない素晴らしい展示と感じました。継之助の人生がストーリーで理解できます。また書状や嘆願書などから、継之助の人物・生真面目さ・晩年でも勉強に熱心だった姿勢が伝わってきました。

● 長岡について

北越戦争・第二次世界大戦と二度焼かれたため歴史的建造物が少ないのが残念ですが、それもまた歴史である、と思います。なぜそういった建造物が少ないのか、という視点で長岡を深掘りすることもできるのではないでしょうか。



継之助の「真の心」に触れた朗読を聞く会

かたばみ講座

十一月六日、河井継之助記念館かたばみ講座「司馬遼太郎作『峠』朗読を聞く会」を開催し、友の会会員を含め二十六名の方が参加しました。開演前には特別展示で公開中の「雨龍」と「河井継之助の手記」について館長が解説しました。その後、展示室二階を会場に、朗読家加藤博久氏による『峠』『小千谷談判』の情感あふれる朗読を聴かせていただきました。（伊藤）

河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について学び親しみ、記念館を応援する会です。

●会員数／正会員 500名 協賛 41名 小・中学生 3名 顧問 2名
合計 546名（内、令和6年度会費納付済者442名）

●特典／①入会時に徽章贈呈 ②友の会会報「峠」配布
③交流研修旅行の案内・参加 ④催事案内・参加

●入会手続き／（入会金千円が必要となります）

- ①申込書に入会金と会費を添えて、事務局へ持参。
- ②申込書を事務局へ送り（郵送、FAX）、入会金と会費は銀行振込または郵便振込で納入。（手数料は本人負担となります）

会員募集中

●会費／※会計年度は3月31日まで

- ・入会金／千円（新規入会時のみ）
- ・年会費／①正会員／（ア）小中学生：500円 （イ）高校生以上：2千円
②協賛会員／一口5千円（法人の他、個人でも可）

●口座について

- ・加入者名／河井継之助記念館友の会
- ・口座番号／郵便局 00560-9-96432
長岡信用金庫本店営業部 普1032829
第四北越銀行長岡本店営業部 普1764663
大光銀行本店営業部 普3011256

※郵便局の場合は払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。

●友の会事務局／河井継之助記念館

友の会ホームページアドレス

<https://tomonokai.tsuginosuke.net/>



新入会員ご紹介

（令和6年8月16日から令和7年1月31日まで）

東 樹 隆 志 新潟県長岡市

竹 村 継之介 長野県駒ケ根市

鈴 木 繁 里 東京都東大和市

矢尾板 達 也 神奈川県横浜市

岩 間 竜 生 東京都国分寺市

倉 澤 知 裕 埼玉県桶川市

渡 邊 豊 新潟県新潟市

波 多 恵 理 新潟県長岡市

篠 崎 いず美 新潟県長岡市

柏 木 義 雄 新潟県長岡市

本 田 忠 新潟県長岡市

八 木 秋 薫 東京都中野区

以上12名（敬称略）

記念館近況報告

▼十一月二十日、U-X新潟テレビ21にて「にいがた漫遊 ビビる大木のサムライ見聞録」が放送されました。中田館長が河井継之助及び河井継之助記念館の魅力と意義を存分に発信しました。

▼アンケートコーナーの隣に図書コーナーを設けました。館内で販売している書籍に加え、『峠』と河井継之助関連の書籍をご覧いただけます。

▼ビデオ室に「長岡城復元模型（幕末のころ）」を設置しました。河井継之助が活躍した当時の長岡城下を立体的に捉える事が出来ます。

編集後記

前号から編集作業に参加させていただくことになりました。先日、奇しくも関東在住の大学時代の旧友から記念館を訪れたとの連絡があり、たいへん嬉しく思いました。今号も、読者の皆さまにご満足をいただけるよう、情報や記事を盛り込んでいます。読者の皆さまからの感想やご意見は、今後の会報作りにつながりますので、ぜひお寄せください。（棚橋）

【訂正とお詫び】 会報『峠』36号8ページ「総会・講演会報告」「新入会員ご紹介」文中にてお名前の表記誤りがありましたので、訂正してお詫びいたします。

誤…井辺由伸 正…井辺吉伸（総会・講演会報告）
誤…渡辺勇義 正…渡辺勇蔵（新入会員ご紹介）